花王

RORO船定期航路化で製品の安定供給と環境負荷低減を実現

花王は、和歌山工場から首都圏への製品輸送に、トラックの運転車両を切り離してトレーラー(貨物部分)のみを運搬するRORO船を利用することにより、トラックドライバーの長時間・長距離輸送の負担を軽減し、CO_2排出量削減など環境負荷の低減を進める。積み荷の移動にクレーンが不要で、災害時の支援物資などの輸送に有効なRORO船の定期航路化を進める和歌山県と連携し、和歌山市近隣企業や運送会社と協力して2022年6月に試験輸送を実施した結果、10月8日から毎週土曜日の定期航路として就航が実現した。

取り組みでは、和歌山工場から約1kmの和歌山下津港にて、製品を積載したトレーラーを愛媛県の大王海運が運行するRORO船に積み込み、ドライバーは運転車両を切り離して下船、トレーラーのみ千葉中央港へ海上輸送する。千葉中央港に到着後は別のトラックドライバーが運転車両をトレーラーに連結して、沼南(千葉)、岩槻(埼玉)、八王子(東京)、川崎(神奈川)の各物流拠点へ輸送する。

安定した輸送能力を確保するためには、トラックドライバー不足対策と労働環境改善への対応が重要だが、今回のモーダルシフトにより、600km近い距離を無人で輸送することができ、陸送距離が短くなることでドライバーは日帰りで運行が可能となる。運送費用は一部輸送ルートでは増加するが、CO_2排出量を年間355トン削減できる見込みのため、ICP価格(1万8500円/トン−CO_2)を考慮することにより今回の取り組みが可能となった。

「美肌県グランプリ2022」の結果を発表

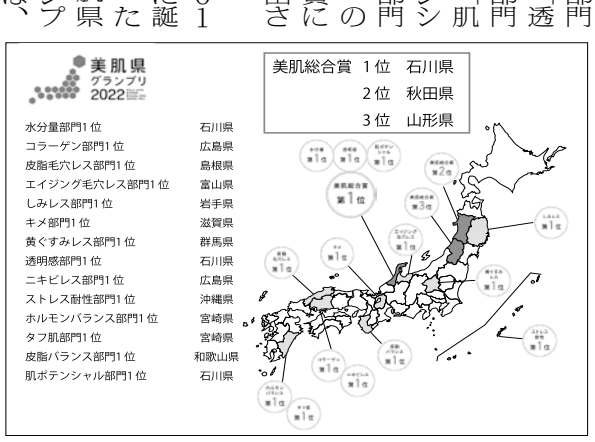
ポーラ

ポーラは、「美肌県グランプリ2022」において、石川県を「総合賞1位」に決定し、3年連続受賞という結果になった。さらに、石川県は「水分量部門1位」「透明感部門1位」「肌ポテンシャル部門1位」の部門賞にも選出された。

2012年に誕生した「美肌県グランプリ」は、ポーラのパーソナライズドサービスブランド「APEX(アペックス)」が保有する約2000万件もの肌のビッグデータを活用することで、日本各地の個性を知り、自分の肌を慈しむきっかけにしてほしいという想いで毎年開催してきた。

同グランプリでは、全国47都道府県を対象に、1年間で集めた肌データ(28万6062件)を47都道府県別に集計し、全14部門の平均スコアで、総合賞と部門賞の順位を決定。昨年に引き続き、多様性にあふれた肌の美しさを讃えることをテーマに総合賞と、肌の個性を表す美肌の要素別に14の部門賞のベスト3を選出した。

1位の石川県は、肌ポテンシャルがとても高いため、この先もよい状態が維持されることが期待される。2位の秋田県は、キメが整った刺激に強い肌が特徴で、ハリの要素の1つであるコラーゲンの状態もよく、シミの要因となるメラニンが少ないことも特徴だ。3位の山形県は、総合的に全国トップレベルで肌の状態がよく、糖化が少なく、透明感のある肌が特徴となっている。



私のH&B日記

儚さ消費

人生で「待つ」という時間はどれくらいあるのだろう。コンビニのセルフレジで待つ間、ふと考えてしまった。気づけば、セルフレジに列ができ、有人レジが空くという光景も珍しくなくなった。レジカウンターを挟んで店員と客が「待つ」時間を共有する。

学生時分のコンビニバイトの仕事はレジ打ちが中心で、品出し・補充や掃除はサブ的なものだった。セルフレジの普及で仕事業務の逆転現象も起きているか。時間帯にもよるが、レジが無人で複数のスタッフが品出しに勤しむ。無人となったレジ周りにはホットスナックコーナーがでんと構える。かつて冬場限定のコーナーは、通年化し、種類も増えた。レジから「出来立てです」との接客マニュアルは、私のバイト時代にはなかった。まだホットスナックをセルフで購入できるコンビニは少ない。気になる商品も、レジでの会計時間と天秤にかけて躊躇している私のような客は1日にどのくらいいるだろうか。効率化と利便性の追求で、それもいつしかセルフサービスになるのだろう。

コンビニは「時間」と密接である。24時間いつでも利用できることを土台に取扱商品を増やしながら成長拡大してきた。コロナ禍に入り、時短営業を取り入れる店舗をちらほら見かけるようになった。店舗の営業時間の短縮は人手不足などの理由もあるようだが、コロナでなければ、多少の無理をしてでも何とか乗り切ろうとしていたのではないか。個人レベルで強まった「見直し」風潮は、社会全体に広がり、「世直し」に向かう。

さて、レジを待つ間に、人生における「買う」という行為を行うかについても考えてみる。レシートをもらう習慣のない無精者である。新商品や限定品など衝動的に買ったものを振り返って、反省よりも嬉しい記憶がたくさん蘇ってくるのであれば数えてみようとも思うのだが、「新しさとは瞬間的で儚い」とはよく言ったものである。

ならば、儚さを消費している――。聞こえは良さげだが、セルフレジの前では虚しさを助長された。(菅)